

袁紹対袁術

佐藤ひろお

第〇回 司馬仲相が漢末を論じ、天帝の命を受ける

曹操が中原を制覇し、劉備・孫権が辺境に割拠してから、一八〇〇年。ある春の日の午後、東京都内の公園では、三国志好きが集まるイベントが催されていた。三国志の話をしながら、お酒を飲もうという趣向である。桜が見頃なので、花見客で混雑している。

「生まれた時は違えども、死するときは、同年、同月、同日……」

どのイベントに出ても、同じ掛け声である。

ぼく——柴田忠聡は、周囲に同調すべく、紙コップを持ちあげ、ぼそぼそと口を動かした。唱和のふりである。恥ずかしくて、声を出す気にならない。

(……)

ぼくは、周囲を見回した。

(これだけ人が多ければ、見つかることもないよな)

大学を卒業して、中堅と言われる会社に入った。今年の春で、社会人三年目になる。間が悪いことに、会社の花見も、同年、同月、同日に、同じ公園で行われている。このイベントに参加したいから、仮病を使った。

大学では、文系学部に所属した。漠然と、大学院に行つて勉強を続けたいと思っていた。だが、先輩たちの事情を聞いて、進学をあきらめた。この国で、文系の大学院に進むことは、あまりにも厳しい。社会人になったら実現したいこと、この会社で挑戦したい仕事。就職活動のとき、それらしい志望動機を並べた気がするけど、忘れてしまった。仕事は、あまり面白くなかったが、お金の心配をせず、土日に三国志の本を読み、こうしてイベントに参加できているのだから、現状に満足すべきだと思っている。

「柴田さんは、どの武将が好きなんですか」

たまたま隣に座った、中年女性から話し掛けられた。初対面同士でも、円滑に話ができるように、胸に名札を付けている。気の利いたニックネームが思い

つかなかったので、本名の「柴田」を書いていた。

「うーん、袁紹ですかね」

「袁紹ですか。袁紹のどのあたりが好きなんですか」

挨拶がわりの会話であることは、承知している。でも、三国志のことを聞いてもらえるのは嬉しい。日頃から温めている思いを、口にしてみた。

「もしも、ぼくが袁紹の配下だったら、きっと彼に、天下を取らせることができたと思うんです。官渡で曹操と戦ったときも、戦いを始める前に、ほぼ勝っていたようなもので」

「なるほど。袁紹は、名族ですし」

期待する反応と少し違うが、ぼくは、さらに持論を展開した。

「名族といえば、袁術も凄いとってます」

「ハチミツ皇帝が」

「当時、裕福な家の子は、みんな、蜂蜜のような甘いものを好んだみたいですよ」と、出典不明の、読みかじった雑学を披露しつつ、「袁術は、空気が読めないバカ、ぐらいに思われていますが……」

「だって、負けてばかりじゃないですか」

「いえいえ、初期において、最も有望な勢力でした。もしも、ぼくが袁術の配下だったら、袁術に天下を取らせることができたと思うんです」

「本当ですか。柴田さんが、三国時代に居たら、歴史が変わりますね」

「そうかも知れません」

平日の会社は、つまらないことのくり返し。小さな部署のなかの人間関係ですら、うまく回すことができない。そんなぼくにとって、三国時代にタイムスリップして活躍するという妄想は、とても楽しいものだった。何と言っても、歴史の結末を知っている。ぼくを軍師として迎えた勢力は、ひょっとしたら最強ではないのか、と思ったりする。

紙コップを傾け、缶ビールを注ぎ足した。

「ところで——」

さきに、袁紹・袁術の話を、させてもらったのだ。中年女性に、「好きな武将」を聞き返すのがマナーである。そういうマナーは、会社の研修で学んだ。

彼女の名札を見て、ニックネームを確認しなくては……と思っていると、突風で花びらが舞い上がり、視界が霧におおわれた。

目の前に、三国志のドラマDVDで見たような行列が現れ、止まった。見渡すと、イベントの参加者どころか、他の花見客も含めて、ぼく以外、だれも居ない。戸惑っていると、きれいに畳まれた着物を、差し出された。

「撮影か何かですか？」

エキストラへの招待であろうか。しかし、イベントの案内に、そのような情報はなかったはずである。そうか、サプライズか。

「ここは、軍師さまのいる場所ではございません。さあ、こちらへ」

「軍師？」

行列の者たちは、丁寧な頭を下げて、ぼくを輿に招き入れた。

「さっきあなたは、もしも自分が袁氏の配下であれば、天下を取らせられると言いました」

「……」たしかに、言いました。

「ご存知のとおり、袁紹・袁術は、漢を再建することはできず、漢に代わる王朝を創始することもできず、歴史は、数百年の分裂期へと移ります。三国志の時代は、衰退の序章とすべきでしょう」

「ぼくに、どうせよと」

「下を向いて、三つ数えたら、顔を上げてください」

言われたとおりにした。

「もういいですよ」

「ここは、どこですか」

「昊天上帝の居所です」

——儒教の神。

「あなたは軽々しく、袁氏の天命を語りました」

「天命を語ったわけでは……。軽々しくと仰いますが、みんな、それくらいの

話はしていますよ」とくに、あの手のイベントでは。

「天命は、そんなに簡単に変えられるものではありません」

「ぼ、ぼくも、そんなに簡単だとは、思っていません。たかが、三国志ファンが口走ったことを、本気にしないでください」

輿から下ろされた。

小柄な官人に先導されて、薄暗い宮殿のなかを歩く。

「いまから、上帝陛下に拝謁して頂きます」

「なんで、ぼくが」

「上帝陛下は、あなたに、発言の責任を取るようにと、お命じになりました」

「責任とは？」

「袁紹もしくは袁術に仕え、彼らを天下に導いて下さい。さあ、着きましたよ」

反論の隙も与えられず、巨大な廟の前に通された。

「昊天上帝に祈り、あなたの事業の成功を誓いなさい」

「えっ」

観光のために、何回か、閔帝廟に行ったことがある。しかし、拝みの作法なんて見よう見まねで、隣のひとを真似ただけだった。とりあえず、跪き、地面に額を擦りつけて、この悪夢が早く醒めるように願った。

「……」

声なき声が届き、ぼくは、立ちどころに理解した。

袁氏を成功させられなければ、もとの世界に戻れないこと。そればかりか、

ぼくは、タイムスリップした先で余生を過ごすことを許されず、失敗したならば、すぐに死を与えられること。

あまりの苛酷な運命に——というには、リアリティに乏しい。あまりに理不尽な設定、という言葉のほうが、しっくりくる。理不尽な設定のために、悲しみなのか、怒りなのか、よく分からない感情がこみ上げ、目眩がした。

目を覚ますと、そこは、中平六年、長沙の街の酒場だった。

(つづく)